

第Ⅱ章 奈良県の現況

第Ⅱ章では、本県の概況のほか、生物多様性の現状と課題について紹介する。奈良県の魅力的な自然をPRし、それを保全する機運を高める。

北部低地帯の地形は全般的に標高 500m ないし 600m の山地が多くそれらが奈良盆地の四方を囲んでいる。北は平城山丘陵、南は飛鳥の地から高取、竜門山地、そして東は山の辺から大和高原、さらにその東方には室生火山群の山々が連なり、西は矢田丘陵及び生駒、金剛山地が南北に走っている。

南部吉野山地は、東西 70km、南北 80km にわたって広がり、県土面積の約 2/3 を占めている。ここには、吉野川、北山川、十津川の溪谷が南北に流れ、山脈もそれに並行して東から台高山脈、大峰山脈、伯母子山地の 3 つの山脈を形成している。



城跡と奈良盆地が眺望できる郡山城天守台付近

1. 奈良県の地形・地質および気候



奈良県の気候は概ね温暖だが、北部の北西部大和盆地では内陸性気候、北部の北東部大和高原では内陸性気候と山岳性気候の特徴を有し、気温の日較差が大きく、夏は暑く、冬は寒くなる。

一方、南部山岳地では山岳性気候の特徴を有し、特に大台ヶ原を中心とする南東山地は、日本屈指の多雨地帯であり、夏の雨量が極めて多く、冬は厳しい冬山の様相になる。

2. 奈良県の自然の魅力と課題

(1) 本県の自然の魅力

①本県の風土や美しい景観を作り出してきた生物多様性



みたらい溪谷（天川村）



桃尾の滝（天理市）

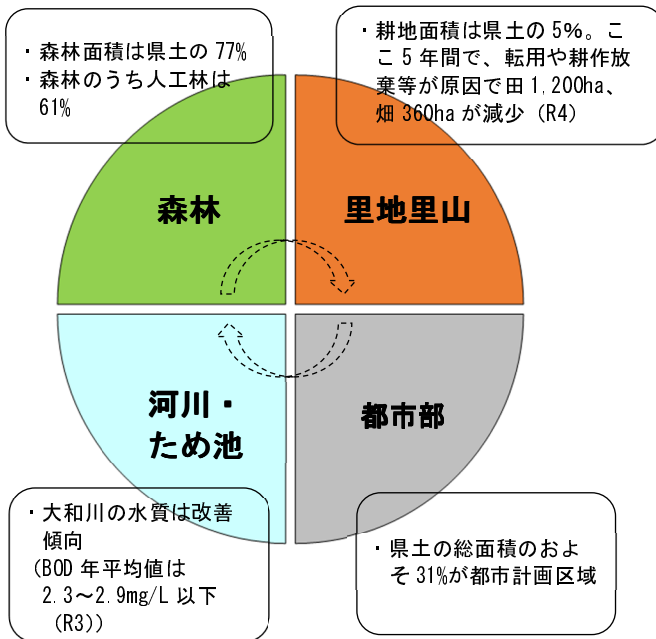


稲渚の棚田（明日香村）

奈良県には、19 世紀の大英帝国の旅行家イザベラ・バードも絶賛した美しい風景が残されている。それらの風景は、人々の生活と生物多様性の調和により生み出されてきた。

（イザベラ・バードの一節をコラムで紹介）

②主要な生態系



国土の約4割を占める里地里山は生物多様性保全上重要な地域

③本県の野生動植物

平地、低山、高山があり、標高100m以下から約2,000mまでの多様な環境を持つ奈良県にはたくさんの魅力的な生き物たちが生息している。

「奈良の生き物たち」(紹介)

奈良県に生息・生育する野生動植物を写真と短文で紹介するコーナー。

○哺乳類：ニホンジカ・ツキノワグマ

○鳥類：コマドリ・イカル

○爬虫類：タカチホヘビ・ニホンイシガメ

○両生類：オオダイガハラサンショウウオ・ナガレヒキガエル・

○魚類：キリクチ・ナガレホトケドジョウ・カワバタモロコ

○昆虫類：オオセンチコガネ・ハグロトンボ

○植物：クマノザクラ・キイジョウロウホトトギス(その他シダ類・コケ類)

○菌類：キリノミタケ・ツリガネタケ(大型)・オオダイアシベニイグチ



(2) 課題

奈良県野生生物目録(2017)に掲載された11,222種のうち、1,535種(14%)がレッドデータブック掲載種。奈良県の豊かな自然は急速に失われつつある。生物多様性保全上、奈良県において特に重要な課題について述べる。

奈良県版レッドデータブック(2016改訂版)

カテゴリー	哺乳類	鳥類	爬虫類	両生類	魚類	昆虫類	甲殻類	ザトウムシ類	クモ類	淡水産貝類	陸産貝類	貧毛類	維管束植物	蘚苔類	計
絶滅種	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	47	1	51
野生絶滅種	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
絶滅寸前種	7	4	0	4	4	18	0	0	1	4	13	0	278	55	388
絶滅危惧種	7	27	3	7	11	52	0	0	1	4	11	1	220	42	386
希少種	9	52	5	7	7	172	0	3	2	0	7	0	249	94	607
情報不足種	0	4	2	0	7	29	1	0	2	0	9	2	45	1	102
計	25	87	10	18	30	272	1	3	6	8	40	3	839	193	1,535

①奈良のシカ

現代の奈良県には、様々な工夫によりニホンジカと人々が共生してきたエリアと、ニホンジカの被害に悩み、個体数管理を行うエリアがある。

・奈良公園のニホンジカ

国の天然記念物に指定されており、殺傷が禁止されている。奈良公園一帯では、人とシカが一見仲良く共生しているように見えるが、その裏では多くの努力が払われている。人と野生動物の共存は理想だが、一筋縄ではいかない。

(鹿愛護会、奈良公園事務所の活動を紹介)



・有害鳥獣としてのニホンジカ

狩猟者の減少や、温暖化で冬の死亡率低下により、ニホンジカの生息数が増加。里地里山の人口減少により、生息域も拡大。有害駆除も追いつかず、県内における適正生息数 6,700 頭に対し、現生息数約 65,000 頭。農林業への被害のみならず、生物多様性にも悪影響。

野生動物と人間との問題はニホンジカにとどまらず、鳥獣被害として、農林水産業に影響を及ぼしている。イノシシ、ニホンザル、アオサギなど。山間部では希少生物のテンさえも有害鳥獣とみなされる。



～生態系への影響～

- ・生息域が標高の高いところへ広がったことで、その地域に生育する植物への食害が増加
- ・生息密度が高くなったことで、エサ不足となり今まで利用しなかった植物への食害が増加
- ・食害により野鳥や昆虫類など他の動植物の生息環境が悪化

(大台ヶ原の2006年の状況と、防鹿柵や駆除により生態系が回復しつつある状況の紹介)

②スギ・ヒノキ人工林の施業放置

奈良県では室町時代より吉野林業の伝統が受け継がれてきた。しかし、世界に誇る美林が存在する一方で、長引く林業の不振などから適切に管理されない人工林（施業放置林）が増加。

令和2年現在、県内の人工林面積（171千ha）のうち、88千haが施業放置状態となっている。



手入れの行き届いた人工林
（明るい林床には下層植生が育つ）



施業放置林
（林床は暗く、下層植生は貧弱）

③タケ・ササ・クズの侵入

手入れの行き届かない竹林が広葉樹林や人工林を侵食し、侵入竹林が増加。森林の多様性や健全性を低下させている。草地や林縁においてはササ、クズが繁茂して他の植物を駆逐し、生物多様性を著しく低下させている。

④外来種

奈良県は内陸県だが、隣接する府県から外来種が流入しており、また園芸種やペットブーム等で持ち込まれた種が、放棄や放流され、県内各地で外来種の生息・生育がみられる。

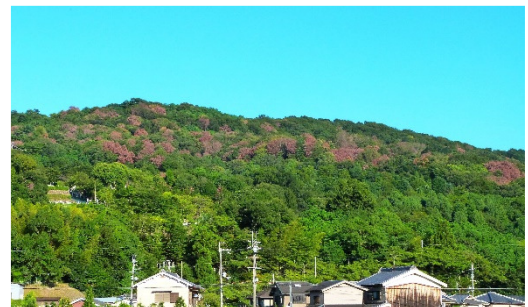
外来種についての国民の関心と理解を深め、国や地方自治体等様々な主体に適切な行動を呼びかけることを目的として、「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」が作成され（2015）、奈良県においても、外来種の侵入状況を明らかにし、その事実を県民に広く周知するために、「奈良県外来種リスト ー奈良県で注意すべき動植物ー」を作成（2016）。2026年度に改訂予定。

外来生物による生態系、人の生命・身体、農林水産業への被害を防止することを目的に制定された外来生物法が令和4年に法改正され、①ヒアリ対策の強化、②アメリカザリガニやアカミミガメ対策のための規制手法の整備、③各主体による防除の円滑化が盛り込まれた。この改正を受け、奈良県における外来種対策を議論するため、奈良県外来生物対策会議を設置（2023年度予定）。

（コラム）ナラ枯れ

里山の利用が減少した結果、短伐期で利用されてきたクヌギやコナラなどの老木が増加。ここにカシノナガキクイムシが侵入し、大量の広葉樹（カシ類を含む）が枯れるナラ枯れ現象が起こった。

平成27年度までは県北部地域において被害が拡大し、平成28年度以降は県中部及び南部・東部地域にも被害が拡散した。平成30年度以降は北部地域で被害の減少が見られ、県全体としては被害は減少傾向だが、南部・東部地域では被害区域が拡大傾向となっている。



奈良市川上町付近のナラ枯れ

(事例紹介) 特定外来生物アライグマ



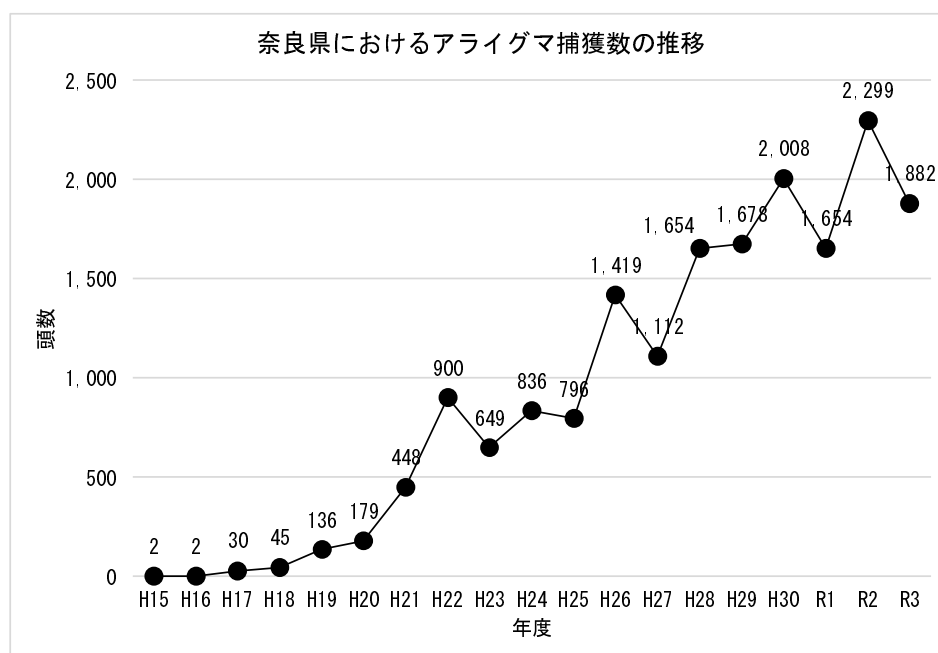
生物多様性に与える影響が大きい
～アライグマ1種の定着が
在来生物数十種の絶滅の危機へ～

- ・アライグマは北米原産の動物でもともと日本にいない外来種。
- ・繁殖力が強い上に日本には天敵となる生物がいないために爆発的に増加している。
- ・夜行性で水辺を好むが、森林、湿地から都市部に至るまで広い環境に適応する。
- ・食性は雑食性で、小型哺乳類、野鳥及びその卵、魚類、爬虫類、両生類、昆虫類、多様な植物の果実まで広範囲。

- ・奈良県では、近隣府県に比べてアライグマの定着が遅かったが、急速に生息数が増え、生息域も拡大した。現在では、県内ほとんどの市町村に生息している。生態系への影響の他、農作物、金魚など農水産物への被害、文化財を傷つけるなどの被害、家屋の屋根裏に住み着くなどの被害が出ている。



家屋侵入被害



(事例紹介) 特定外来生物クビアカツヤカミキリ

奈良県には、吉野山の千本桜、月ヶ瀬梅林など、桜や梅の名所が多数ある。ところが2019年、これらを食害し、枯死させる外来生物「クビアカツヤカミキリ」の侵入が確認された。



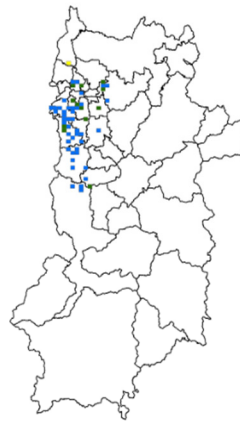
- ・クビアカツヤカミキリは、本来、中国、朝鮮半島などに生息する昆虫であるが、2012年に日本で初めて確認された。
- ・幼虫は2、3年かけて生きた木の内部を食べ、5月末～8月末にかけて成虫になり外に出る。
- ・卵を産み付ける木に嗜好性があるとされており、日本ではサクラ、ウメ、モモ、スモモなどバラ科樹木への被害が確認されている。
- ・激しく幼虫の食害を受けた木は衰弱・枯死するため、農業や観光業への影響が懸念されている。
- ・奈良県で初確認された2019年以降、年々拡大傾向（下図）にある。



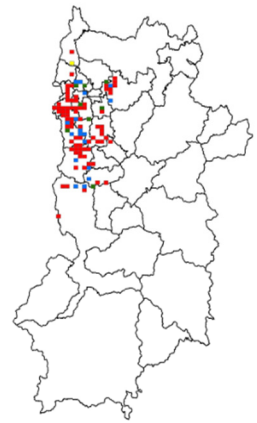
2019年度



2020年度



2021年度



2022年
(2022年10月末現在)

奈良県内におけるクビアカツヤカミキリ成虫および被害木の確認状況

～ ならの桜を守ろう！ 「奈良県サクラ見守り隊」 県民運動への展開 ～

- ・クビアカツヤカミキリ幼虫の食害が進むと防除は難しくなることから、被害を早期に発見し、早期防除することが防除の鉄則である。また、繁殖活動前の成虫を駆除することは直接的に被害の拡大を抑えることにつながる。
- ・被害木や成虫を発見するためには、多くの目で被害を確認することが必要であることから、奈良県は令和4年度に県民参加型の防除ボランティア組織を立ち上げた。
- ・令和4年度は119名が「奈良県サクラ見守り隊ボランティア隊員」として登録され、隊員からは200件を超える活動報告が寄せられるなど防除意識の醸成が図られている。



奈良県サクラ見守り隊ボランティア隊員講習会の様子

(事例紹介) ブラックバス (事例紹介) アルゼンチンアリ (事例紹介) アメリカザリガニ
(事例紹介) 外来アサガオの繁茂

(3) 各主体の取組 ～戦略策定からこれまでの県内での生物多様性保全の取組状況等～

①県

- ・レッドデータブックの改訂・生物目録・外来種リストの作成
- ・特定希少野生動植物 11 種すべてについて保護管理事業計画を策定
- ・外来種対策実施状況
- ・奈良県外来生物対策会議を設置 (R5 予定)
- ・特定鳥獣保護管理計画の改定等

②国・市町村

③県民

④団体 (NPO 法人等)

⑤大学・自然系博物館などの教育・研究機関の取組

奈良県特定希少野生動植物の紹介

奈良県希少野生動植物について、写真、特徴、これまでの取り組み等を紹介するコーナー



ヤマトサンショウウオ



ナゴヤダルマガエル



ニッポンバラタナゴ



コサナエ



ヒメタイコウチ



ヒメイノモトソウ



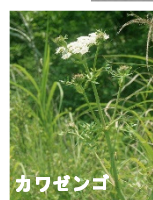
オオミネイワヘゴ



キレンゲショウマ



カツラギグミ



カワゼンゴ



ツクシガヤ